

Sport
Godzilla®

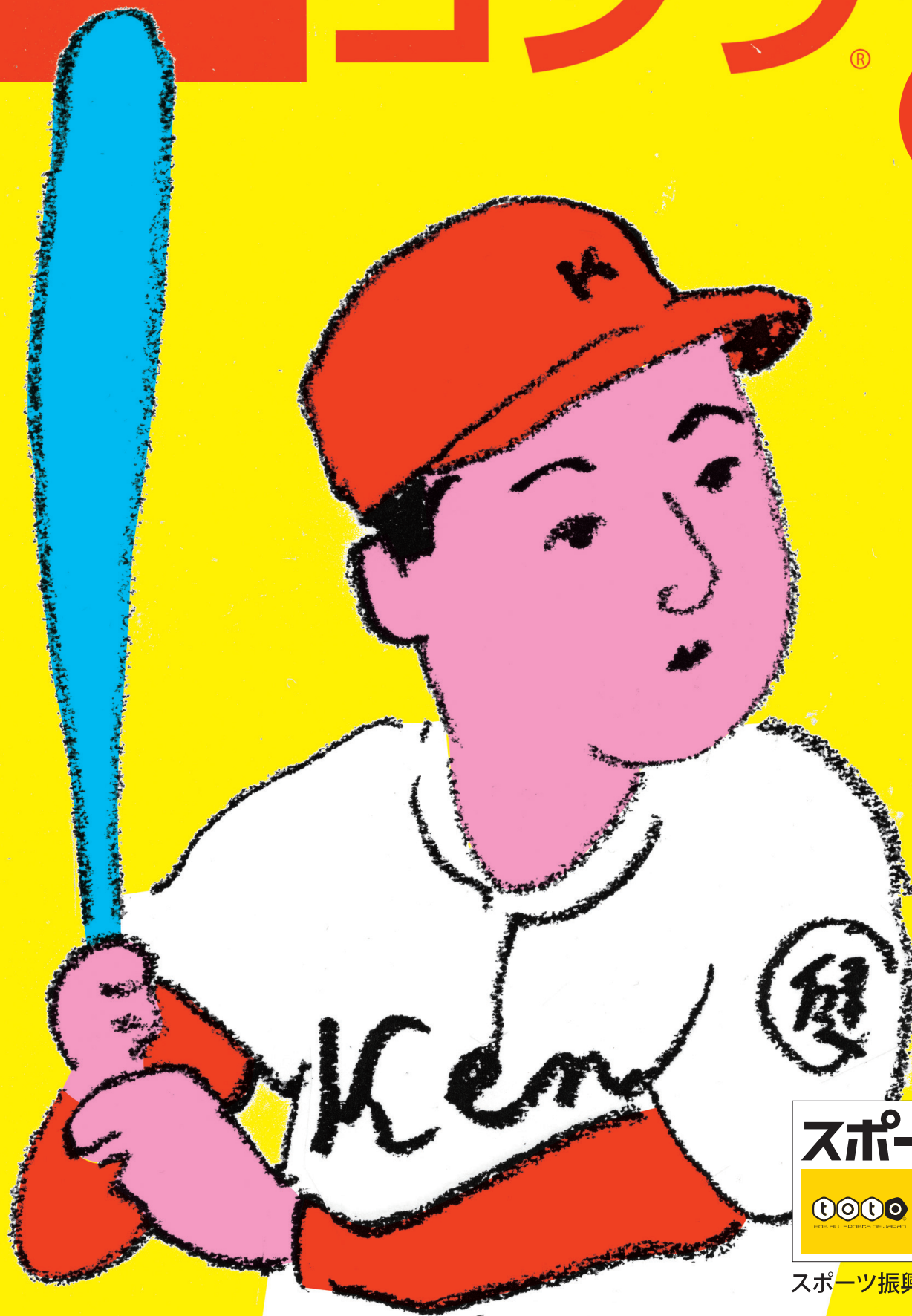
スポーツ ゴジラ®

無料

第 49 号

特集

コロナ禍に考える②
1980年モスクワ五輪をなぜボイコットしたのか!?



スポーツくじ

toto
FOR ALL SERVICES OF LOTTERY

BIG

スポーツ振興くじ助成事業

Sport
Godzilla®

スポーツゴジラ®

〔第49号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 第49号を発刊するにあたり

長田 渚左

■特集■

コロナ禍に考える②

1980年モスクワ五輪をなぜボイコットしたのか!?

長田 渚左

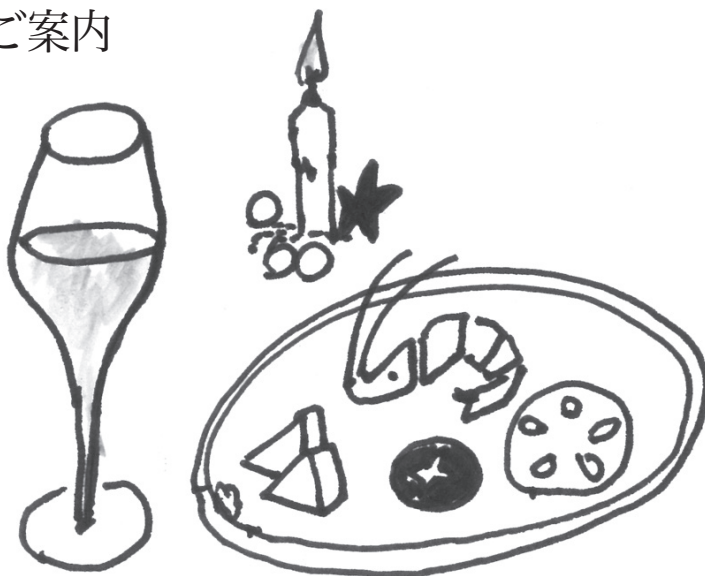
49 夢劇場『馬』No.21「アリエナイ」

長田 渚左

50 「五輪」の息子の独り言

川本 峰男

52 バックナンバーのご案内



【表紙イラスト】南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第49号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



新型コロナウイルスのワクチン開発が世界中で進んでいる。

人類の期待と希望が膨らんでいるが、一方で感染拡大の第三波も世界中で猛威を振るっている。

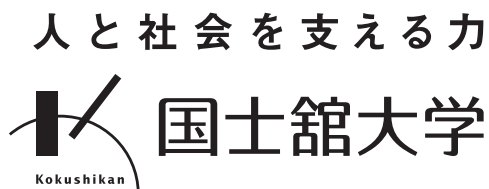
コロナウイルスとの共存を実現させて、東京オリンピック・パラリンピック開催までこぎつけられるのか？ あるいはそれぞれの国をITで繋いで競うといった、従来のカタチとは異なる大会として開催するのか？ それとも苦汁の判断で中止せざるを得なくなるのか？ まだ誰にも定かではない。

そんなコロナ禍の中、よく人から聞かれることがある。「オリンピックは40年ごとに呪われてきた」とはどういうことですか？」今春、ある政治家が言った「40年ごとの呪い」が、心のどこかに残っている

のだろうか。

今考えても配慮を欠いた発言だったと思うのだが、1940年に開催予定だった東京大会は第二次世界大戦のために中止。日本がボイコットした1980年モスクワ大会は『ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議する西側諸国がボイコットした』というのが表向きの理由。ただし、この二大会は、コロナ禍という天災により延期となった2020年の東京大会とは異なり、人災でした。人災ならば防ぎようがあったはずです。この機会にそのことを確認していただきたいと思い、今春の緊急事態宣言の時期にデイリースポーツでモスクワ大会を検証する23回の連載をしました。読者の方からの反響は小さくなく「初めてあの件が解明された」との手紙もいただきました。そこで今回の49号で、23回の連載にアフガニスタン側の視点も加筆して、あらためて掲載することにしました。加えて日本スポーツ学会の地道な活動も知っていただければ幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



立ちどまらない保険。

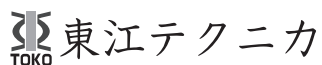


三井住友海上



株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構



(順不同)



コロナ禍
で考える②

1980年モスクワ五輪を なぜボイコットしたのか!?

文 長田渚左



※日本スポーツ学会とは、1996(平成8)年、あらゆる競技の垣根を越えて市民レベルでスポーツを文化として考えようと設立された。会員は元選手、大学教授、医師、企業役員、メディア関係者と幅広い。(会員約二百人)

ご参加になりたい方はスポーツ学会ホームページまで www.sports-gakkai.jp/

会の中で、日本スポーツ学会の長田渚左代表理事(中央)と太田章事務局長(右)は、モスクワ五輪代表選手たちの聖火リレーや開会式参加を要望する署名を山下泰裕JOC会長に手渡した。

2020年オリンピック・パラリンピックイヤーを控えた前年の2019年12月21日、『1980年モスクワ五輪日本代表選手集いの会』が東京・日本青年館で開かれた。モスクワから40年、政治に翻弄された元選手たちが思いを共有し、教訓を発信する場にしようと、日本オリンピック委員会（JOC）が開催した。当時の代表選手は178人。そのうちの82人が会費1万円で参加した。

現在JOC会長で柔道の山下泰裕、前JOC会長で馬術の竹田恆和をはじめ、日本陸上競技連盟マラソン強化戦略プロジェクトリーダー瀬古利彦、日本レスリング協会副会長兼専務理事の高田裕司など、各競技団体の顔ともいえる面々が一堂に会した。彼らもまたモスクワ五輪の幻の代表だったのだ。

会は、日本スポーツ界では歴史的な催しだった。通常五輪の日本代表ともなれば、大会前の結団式、現地の選手村、また試合後の祝勝会などで、オリンピックとして、さまざまな機会に顔を合わせること

になる。当然そこには互いへの関心が生じ、活躍や健闘を知ること、競技の枠を超えて、友情や交流が生まれる。それこそが同じ五輪を体験した横のつながりとなって、一生の宝にもなる。

ところが、80年モスクワ五輪の幻の代表に限っては、まったくそれがなかった。彼らはそれぞれの競技の代表権を獲得しながらも、日本が大会に参加しなかったため、ただの一度も集まる機会がなく、それ以後を過ごした。

モスクワ五輪の4年後のロサンゼルス五輪で再び代表になることができた者は良いが、さまざまな事情でモスクワを一生に一度のチャンスとした者にとっては、その後の40年近い年月が途切れたままの競技人生と自分の選手生命とは何だったのか!? という自問を繰り返しながら、今に至っている……。

この日の集いには当時15歳で、体操女子最年少代表だった内田桂（現姓津田）も出席。55歳になっていた。

「4年ごとのオリンピックが来るたびに、皆は出られていいなあ……」と思ってました。妙にうらやましくなつて、私だって代表だったのに、なぜ？ っていうのも思っていました。なぜ私たちだけが（五輪に）出られなかったのか？ オリンピックのたびに頭をよぎりました」。82人の幻の代表選手たちは、あつちでも、こつちでも昔話に花を咲かせているように見えたが、よく目を凝らすと、同じ競技団体で輪になつてゐるばかりだった。

そんな様子を察してか、マラソン代表だった瀬古利彦は中締め挨拶で「今日、幻のモスクワ代表選手が集まつたことは大きいと思います。でも不思議ですよね。同じモスクワ代表でも、ほとんどが初対面、初めまして……ですものね」。

モスクワ五輪から40年近くがたち、所在の分からない人、連絡の取れなかった人も少なくなつた。

馬術の幻の代表で前JOC会長の竹田恆和も素直な感想を述べた。

「今日、ここに集まつた人たちは良かったと思います。ですが、今日ここに来られなかった人が問題ですし、心配です。たつた一度の代表だった方々も多きいたわけですから……」

幻の代表たちは全員で集合写真に納まつた後、隣に新築された五輪博物館『日本オリンピックミュージアム』に誘導された。エレベーターで階を上ると、各大会の栄光の展示品が所狭しと並べられていた。幻の代表選手の目当てはたつた一つだった。それは日本が初参加した1912年、第5回ストックホルム大会からの歴代五輪日本代表選手の名前を刻んだ壁だった。そこで彼らは、指でなぞるようにして、目を細めて自分の名前を探し出した。

すると、あつちからもこつちからも声が上がった。「あつた！」「本当にあつた！」「本当に名前が入っていた」「良かったーっ」次々にスマホを取り出して、自分の名前を写真に撮った。

幻の代表たちは続々と同じようなしぐさで自分の

名前をじーつと見つめた。その様子を見ながら、私は何とも言えない思いにかられた。なぜ、彼らは、彼女たちは、長く厳しい練習の末に日本の代表になりながら、本番の大会に臨むことができなかったのか。不参加という決定は、いったい誰のためであり、どんな思惑があつて、何のためだったのか。そしてそれは正しい選択だったのか。そしてまた二度とモスクワ五輪のようなことは、日本には起きないと言えるのか。40年という時間を遡り、検証する……。

〈モスクワ五輪幻の選手団〉

▼ヨット

池田 正・小笠原憲男・箱守 康之・花岡 一夫
日高 茂樹・広沢 孝治・三船 和馬・吉川 剛

▼ウェイトリフティング

安藤 謙吉・後藤 節哉・高田 邦彦・高橋 雅朝
平井 一正・福田 輝彦・宮下日出海・島屋 八生
湯地 保雄

▼ハンドボール

福井 秀人・大畑 孝広・井藤 英忠・津川 昭
志賀 良弘・関 健三・斎藤将一郎・斎藤 幸司

山本 伸二・大原 真造・穂積 豊彦・中本 満明
蒲生 晴明・池ノ上孝司

▼自転車

池浦 敏秋・岡堀 勉・斎藤 邦夫・坂本 典男
山崎 敏正・渡辺 幹男

▼馬術

小畑 隆一・杉谷 昌保・高宮輝千代・竹田 恒和
豊田 一夫・平沢 敏美・内藤左智子・中俣 修
植田 元・斎藤庫之丞

▼フェンシング

坂倉 英行・大塚 清・佐藤 範幸・千田 健一
村田 省・伊藤真知子・岡 秀子・庄司 孝子
横井 晶子・吉岡 正子

▼柔道

恵谷 正雄・柏崎 克彦・香月 清人・河原 月夫
藤猪 省三・森脇 保彦・山下 泰裕

▼ライフル射撃

赤塚 裕幸・尾崎 道治・蒲池 猛夫・勢見月文久
平井 親文・細川 幸雄・松尾 薫

▼クレール射撃

石原 敬士・平野 元治・山下 友也・渡辺 和三
近代五種

▼近代五種

内田 正二・川添 博明・坂野 勝
カヌー
井上 清登・福里 修誠

▼アーチエリー

広瀬 明・松下 和幹・岡崎 芳子・藤田 正子

▼陸上

伊藤 国光・喜多 秀喜・新宅 雅也・豊田 敏夫
中村 孝生・長尾 隆史・森口 達也・臼井 淳一
片峰 隆・阪本 孝男・高橋 卓巳・室伏 重信
吉本 敏寿・松井 江美・八木たまみ・瀬古 利彦
宗 茂・宗 猛

▼水泳

青木 正男・樺谷 博・香山 進介・坂本 弘
設楽 義信・中西 俊二・原 秀章・三科 典由
山崎 重樹・吉原 一彦・大崎 芳栄・久米 直子
長崎 宏子・沼野美奈子・築瀬かおり・山崎 幸子
渡辺智恵子・伊藤 正明・馬淵よしの・山中理貴子

▼ボート

秋吉 健吾・磯 富昭・岩波 健児・津田 真男

▼ボクシング

荒井 幸人・菅藤 弘・木庭 浩一・副島 保彦
中村 司・樋口 伸二

▼バレーボール

石川 嘉枝・清水 睦子・横山 樹理・水原理枝子
小川かず子・奥嶋 桂子・江上 由美・吉永美保子
池知 晶代・広瀬美代子・三屋 裕子・古橋美知子

▼体操

梶谷 信之・梶山 広司・北川 淳一・具志堅幸司

▼レスリング

外村 康二・山脇 恭二・余吾 元博・赤羽 綾子
穴見 利香・内田 桂・加納 弥生・野沢 咲子
日向 由佳・松本 由子
入江 隆・太田 章・清水 一夫・高田 裕司
多賀 恒雄・伊達治一郎・富山 英明・宮原 章
森 康哲・谷津 嘉章・朝倉 利夫・今村 民夫
長内 清一・柏木 究・佐々木文和・高西 一宏
野口 次夫・藤森 安一・南 敏文・宮内 輝和



1980年モスクワ五輪ボイコットまでの経過

- 1979年12月25日 ソ連軍が親ソ派政権を誕生させるためアフガニスタンに侵攻。この軍事介入に国連総会は圧倒的多数でソ連軍の即時撤退を要求。
- 80年1月4日 カーター米大統領がソ連のアフガニスタン侵攻に対する制裁措置として経済制裁とともに、モスクワ五輪ボイコットの可能性を表明。
- 同1月20日 カーター米大統領が、ソ連軍が1カ月以内にアフガニスタンから撤退しない場合、五輪開催地を変更するか延期または中止すべきと表明。
- 同1月26日 米国オリンピック委員会理事会、全会一致で2月20日までにソ連軍が撤退しない場合、カーター大統領の要請を支持する決議を採択。
- 同1月30日 伊東官房長官、大来外相、谷垣文相の3閣僚協議会で「五輪問題はソ連に不快感を示す具体的措置として重要な手段」との認識で一致。大平首相もこの方針を了承。
- 同2月12日 I O C総会でボイコットに強く反対する声明を採択。満場一致でモスクワでの五輪開催を確認。「西側諸国が招待に応じなくとも開催」とキラニン会長が声明発表。
- 同3月26日 英国オリンピック委員会が総会を開き、圧倒的多数で五輪参加を決定。反対票わずか1。サッチャー首相のボイコットの圧力をはねつける。
- 同4月12日 米国オリンピック委員会の総会で無記名による投票が行われ、不参加1604、参加797、棄権1で五輪不参加を決定。
- 同4月15日 衆院予算委で大平首相が「ソ連軍がアフガニスタンから撤退しない限り、五輪参加は望ましくない」と公式に不参加の方針を表明。
- 同4月21日 競技団体のコーチ団会議に柔道の山下泰裕、レスリングの高田裕司ら金メダル候補選手ら91人が出席。五輪参加を涙ながらに訴える。
- 同4月25日 伊東官房長官、大来外相、谷垣文相が協議して五輪不参加の政府見解を発表。大平首相も了承し、J O Cの柴田委員長を国会に呼んで「事実上の勧告」として伝える。
- 同4月26日 J O C総会で出席47人（代理2人）の全会一致で「五輪参加を原則とする」との申し合わせを採択。
- 同4月26日 カナダオリンピック委員会が不参加を決定。不参加137、参加35票。
- 同5月10日 西ドイツを訪問中の大平首相がシュミット首相との会談で五輪不参加を確認。米国支援の連帯強化が平和的解決のカギとの見解で一致。
- 同5月15日 西ドイツオリンピック委員会の総会で不参加59、参加40、棄権1で五輪ボイコットを決定。政府のボイコット勧告に応じる結果に。
- 同5月24日 日本体育協会臨時理事会に伊東官房長官も出席して大平首相の不参加の意向を伝え、五輪参加反対を決議。J O C臨時総会での投票の結果、不参加29、参加13、棄権2で不参加が決まる。
- 同6月10日 スイス・ローザンヌでのI O C理事会で日本側が女子バレーボールの特例出場を訴えたが、「各国オリンピック委員会単位の参加が原則」と却下され、日本選手の出場が完全に閉ざされた。
- 同7月16日 モスクワ五輪日本代表選手団の監督、コーチ約40人を集めて都内で五輪代表認定式が行われ、選手に代表認定書が渡される。
- 同7月19日 モスクワ五輪開幕。80カ国・地域（I O C加盟は約140）が参加したが、米国、日本、西ドイツなどが不参加。参加した英国、フランスなど10カ国が開会式の入場をボイコットした。

1979年『平和の祭典』が揺ぐ

1980年7月19日から開かれた第22回五輪モスクワ大会は、社会主義国で初めて開催された大会だった。すべての面で史上最大規模と言われ、スタジアム69、体育館230、プール26など施設面は国の威信をかけて充実させ、開催準備は整っているとアピールされていた。モスクワは世界中の注目を一身に受けたソビエト社会主義共和国連邦の首都だった。ところがその平和の祭典を翌夏に控えた79年12月25日、同じソ連の軍隊が突如として、隣国のアフガニスタンへ軍事侵攻した……とのニュースが世界中に流れた。

ユーラシア大陸の東西・南北の交通の要であったアフガニスタンでクーデターが起きた。

ソ連はアフガニスタン国内で統治力を欠いていたハフィーズッラー・アミン革命評議会議長を処刑、ソ連が庇護するバブラク・カルマルが革命評議会議

長兼首相に就任した。ソ連はアフガニスタンへの軍事侵攻の直後は「ゲリラ鎮圧のために、アフガニスタン政府の要請で派兵した」と主張していた。しかし程なくして米国情報機関は「クーデター直前に5000人以上の戦闘部隊を首都カブールに空輸し、その後も本格的な駐留を行っている」と伝えた。完全な軍事侵略だった。

この問題が報道されたときのことを、国際オリンピック委員会（IOC）のマイケル・モリス・キラニン会長は、著書『オリンピック激動の歲月』（ベイスボール・マガジン社刊）の中で、こう振り返っている。

「多くの人が思ったのは『いったいアフガニスタンが世界地図のどこにあるのか』ではなかったか。（中略）クリスマス過ぎに初めてアフガニスタンへのソ連軍の進出を聞いたときは、私もそれほど重大なこととは思わなかった。子どもや孫に取り囲まれていたこともあるが、率直にいつてその後に見られるよ

うな危機に発展するのは、夢にも考えていなかった」(※8ページに地図)

年明けの1月4日、米大統領ジミー・カーターは、ソ連のアフガニスタン軍事介入に対する制裁として「モスクワ五輪ボイコットも辞さない」と発言。同6日、米国に呼応したサウジアラビアがボイコットを表明。同20日には、さらにカーター大統領が「1カ月以内にアフガニスタンから撤退しない限り、アメリカ選手団はオリンピックに参加すべきでない」と表明。同時に友好国の西ドイツ、英国、フランス、日本にもボイコットを呼びかけた。

2月1日、日本政府も見解を表明した。

「オリンピック大会は本来スポーツを通じて、より良き、より平和な世界の建設に助力し、国際親善を創りだすことを目的としている。従って、モスクワオリンピック大会について、政府はソ連のアフガニスタン軍事介入、これに対する厳しい国際世論等について重大な関心を払わざるを得ない。日本オリ

ピック委員会はこの事態を踏まえ、諸外国の国内オリンピック委員会と緊密な連携をとって適切に対応されたい」

諸外国と足並みをそろえる——玉虫色の最初の表明だった。

切実な参加要望、日本政府が一蹴

1980年4月12日、米国オリンピック委員会(USOC)は総会でモスクワ五輪ボイコットを決定。

日本では競技団体のコーチや選手によって「コーチ団会議」が開催され、参加を訴える要望書が作成された。同23日、JOC臨時常任委員会の席上で、柔道コーチの佐藤宣践が読み上げ、柴田勝治JOC委員長に手渡された。

「4月12日、ついに米国オリンピック委員会は同大統領の要請を受け入れボイコットを決定いたしました。対米協調を基本姿勢とする我が国も、2月1日

に示された政府見解では『参加、不参加はJOCが決定するもの』としながらも、米国オリンピック委員会の態度決定により、4月15日の国会において『外交政策上参加は好ましくない』と、政府の公式表明と受け止められる発言がありました。スポーツマンの意志とは無関係に、政治的理由からオリンピック参加問題が論ぜられていることは誠に残念であります。オリンピック運動の目的が『スポーツを通じて人種・宗教・政治等の垣根を越え、国際交流の環を拡げ世界平和の建設に助力する』にあることは言うまでもありません。この理想を理解しスポーツを愛する人々は全世界にまたがっており、宇宙中継で放映されているオリンピック大会は、10数億人が視聴していると言われます。(中略)今さら『スポーツと政治は分離されるべき』などの論理に拘泥するつもりはありません。ただ、このたびのアメリカ政府の暴挙によって、オリンピックが政治の道具に利用されたことは、ソ連を中心とする東欧圏諸国の

報復を当然誘発することになりました。まさにオリンピックは危機に直面したと言わざるを得ません。ソ連のアフガニスタン軍事介入には、スポーツを通じて世界平和の建設を実践している我々スポーツマンの大多数が憤りを抱いております。しかし全世界の人々が注目するオリンピックを、人類文化の頂点に位置するスポーツを政治の具として滅亡の道を歩ませることも断じて看過すべきではありません。我々スポーツマンはオリンピックに参加することにより、スポーツを通じて世界の緊張緩和に貢献していると確信しております」(『近代オリンピック100年の歩み』ベースボール・マガジン社刊より) 切々たる願いと広い視野での要望書は、世論に届くかに見えたが、2日後の4月25日、政府が2回目の見解を同じ柴田委員長に伝えた。

「一、モスクワ五輪に選手団を派遣することは望ましくないと結論に達した。二、五輪の目的は国際親善にあり、すべての国の祝福の中で各国選手が参加

しうる環境を確保する重い責任を開催国が負う。三、しかしソ連による軍事介入は、平和と友好を損なうとの国際世論の厳しい非難を惹起^{じゃつき}し、我が国としても重大な関心を払わざるを得ない」

政府からの不参加勧告で、あらゆるスポーツ関係者の頭上に暗雲が立ちこめた……。

当初わずか2団体だった「ボイコット派」

1980年2月1日、モスクワ五輪への参加について、1回目の政府の見解では「適切に対処された」と、含みを持たせた表現だったが、同年4月25日の2回目の政府見解は、「選手団に参加させることは望ましくない」と、強いものになった。これは同月23日、西ドイツ政府が西ドイツオリンピック委員会に対して不参加を勧告する閣議決定したこと^{に倣い}、日本政府も強い態度を示したものと見られた。

これらを受けて翌26日、午後1時からのJOC総

会では、各競技団体代表による意思確認が行われた。伊藤公ブログ『モスクワ五輪ボイコットの真相』によると、

藤田明（水泳）「日本水泳連盟はJOCが参加するよう強く希望する」

伊黒正次（スキー）「参加すべきだ。自費参加でもまい進すべきである」

広瀬喜久男（漕艇）「JOCは参加と責任を果たすべきだ。『国益とは何か』について日本政府がJOCで説明すべきだ。5月7日に大平—カーター会談が行われるようだが、オリンピックを政治の道具にしてほしくない」

松平康隆（バレーボール）「政府の立場からすれば、このような見解が出るのは当然。しかしJOCは参加の線で進めてほしい。バレーボールは個別参加であつても参加したいと思っている」

安斎実（ライフル射撃）「IOCが中止しない以上、参加するのは当然である。参加することがソ連のア

フガニスタン侵攻を認めることにはならない」

牧野呂（アイスホッケー会長・堤義明の代理）「N

OC（各国オリンピックピック委員会）が不参加を云々す

うんぬん

ること自体間違いだ。スポーツが政治に対して超然としていられるかの問題はあるが、参加すべきだ」

各競技団体選手委員のほとんどが参加を希望し、

「参加しない・ボイコットすべき」は26団体のうち

で2団体に過ぎなかったが、それぞれの委員のスピ

ーチの最後に「最終的にはIOCの決定に従う」と

いう団体が9つあった。和をもつて横並びを尊ぶ日

本的な特徴が出たといえる。この総会でIOCのキ

ラニン会長宛てにIOCは激励兼アピール文を打電

することが決められ、実行された。キラニン会長殿

……で始まるアピール文は次のようなものだった。

「時間は切迫しています。いまや貴殿が米ソ首脳と

一刻も早く会談の機会を持たれ、危機に直面してい

るオリンピック・ムーブメントを救い、すべての国

のNOCが参集して正常な形でオリンピック大会が

開催できるよう事態を大きく改善する何らかの道を

拓くために、貴殿の最大の努力を懇請し、その成功

を祈るものです」。その後、確かにIOC会長と米

ソ首脳の会談は行われたが、収穫はなく、キラニン

とカーター米大統領は「水と油」だったと言われた。

テレ朝、五輪騒動で特番・生放送で選手「乱心」

1980年5月5日、テレビ朝日がモスクワ五輪

ボイコット問題を扱った特別番組を放送した。当時

テレビ朝日は30億円を投入し、モスクワ五輪の放映

権を獲得していた。思わぬボイコット騒動で、朝の

8時30分から深夜まで17時間もの特番で世論に直接

訴えかける内容だった。

番組名は『オリンパソン'80』。総合司会は久米宏

とジュディ・オング。生放送中にボイコットに賛成

か、反対かの視聴者からの声を電話集計し、経過を

公表しながらの進行だった。

宮崎勝治著『調研究室報』（朝日新聞社刊）199

0年8月号によると「1000台用意した電話は朝から鳴り続けた。青山、赤坂、五反田の電話局の交換機がパンクするほどだった。実際に受け付けすることができたのは二万件たらずだったが、五〇〇万件の通話が殺到した、と推定された。朝の内はボイコット反対が圧倒的で、正午現在の集計では参加すべきが二九六五、参加反対が一八四九だった。ところが午後三時半すぎには参加四〇一七に対し、不参加三二九〇。午後六時には参加五〇〇七に対し不参加四七三一と、ボイコット派がじりじり勢いを増し、午後九時にはついに参加七二七〇に対して不参加七四〇〇と、ボイコット賛成派が反対派を追い抜いてしまう。深夜の最終集計で参加九九七三、不参加九二六三とボイコット反対派が賛成派を抜き返したものの、絶望感にひしがれて、その前にスイッチを切ってしまったスポーツ関係者も多かった」

モスクワ五輪レスリングフリースタイル82キロ級の代表で、現在、早稲田大学教授の太田章は、テレ

ビ番組をリアルに覚えていた。

「あの特番の10日ほど前にモスクワ五輪への決起集会があつて、日本オリンピック委員会に強く訴えたのが、柔道の山下泰裕さんとレスリングの高田裕司さんでした。翌日の新聞記事には、泣いた高田さんを女々しいと批判したものが多く、現場の記者が『高田涙の訴え!』という応援記事を書こうとしたら、デスクに怒鳴られたそうです。高田さんはそれからマスコミが大嫌いになつて、すべてのマスコミを拒絶しました。5月5日の特番にも高田さんが出て、オリンピックに行かせてくれと訴えるはずでしたが、キャンセルされました。代わりにある選手が出演しました。事前の打ち合わせでは『どうにかオリンピックに行くしてくれ』と選手の立場から訴えるはずだったのに、どういう圧力が加わったのか、生放送が始まった途端に『ソ連は悪い国だから行くべきじゃない』と言っちゃった。当事者の選手が行くべきじゃないと言うのなら、行かなくていいんじゃない

やないの……って番組の流れが大きく変わっていった」。JOCスポーツ関係者は、番組で集計データが逆転したことに加えて「オリンピックに行くべきじゃない」と言った選手の発言で、二重に頭を抱え込んだ。その時の最終集計で、参加が不参加を上回る数字を目にすることなく、テレビのスイッチを切った人は多かったという。

モスクワ五輪大会ボイコットの先導者は、米国大統領のジミー・カーターだった。表向きは、ソ連のアフガニスタン軍事介入への制裁だったが、彼が行動した背景には切実な裏事情があった。

1979年11月、イランのテヘランで米国大使館が革命派の学生に占拠され、大使館員ら52人が人質となる事件が発生した。イラン革命政府は米国に亡命したモハンマド・レザー・パフラヴィー元皇帝の引き渡しを要求。その交渉が難航したことなどから、米国民の政府への批判は増大し、カーター政権への不信は高まっていった。翌80年11月には大統領選挙

を控えており、カーター大統領が人気回復を図りたいと躍起になっていたところ、79年12月下旬、ソ連のアフガニスタン侵攻が起きた。渡りに舟、失地回復のチャンスとみたカーター大統領は、機を逃さず表明した。「ソ連軍が1カ月以内にアフガニスタンから撤退しない限り、アメリカ選手団はオリンピックに参加すべきでない」。さらに友好国にもボイコットを呼びかけた。

その言動について当時のIOCのキラニン会長は、著書『オリンピック激動の歲月』の中で、痛烈に批判している。

「アフガニスタンの正邪・善悪はひとまず置くとして。問題なのはオリンピックの年とかち合う大統領選挙で、自分の政治生命の延長をはかろうとあがいている一人の男の判断が、オリンピックを自分のための選挙戦の中に引きずり込んでしまったことである」

しかし当時カーター大統領の真意を的確につかん

で伝えた日本のメディアはあったのだろうか。

当時の論調の多くは、五輪をボイコットするのは、アフガニスタンでのソ連の軍事行動への抗議であり、日本がボイコットをする行動は正義なのだというのが、一般に伝えられた大義だった。4月25日付読売新聞の社説はこう書いた。『私はどうしてもモスクワに行きたい』と叫ぶ選手は、今日もソ連の大軍が、戦車と戦闘機で、アフガニスタン国民の血を流していることを考えたことがあるのだろうか。モスクワのメダルと、アフガンの血と、この明暗を……』。

あの日から約40年がたつ2019年12月21日に開催された「モスクワ五輪日本代表選手集いの会」の壇上に立った太田章は「……今もモスクワを考えると涙が止まらなくなる」と人目も憚らず、涙を流した。「ボイコットを呼びかけたカーターの行動は間違っていたと確信しているが、彼はアメリカ選手団とその家族をホワイトハウスに招き、我々は世界平和のためにオリンピックをボイコットするのだ」

という大義を与えた。アメリカの幻のモスクワ代表は、アメリカのプライドをもらった。日本の我々がもらったのは、小さなバッジと認定証だけだった。その後、一度も皆が会う機会もなければ、何の説明もなく39年が過ぎた……』。

80年5月JOC臨時総会政府は予算を“人質”に

モスクワ五輪のボイコットを最後まで反対した自転車車の日本代表監督で連盟の代表だった岡本雄作は、ボイコットが決定される1980年5月24日の臨時総会に出席したときの不可思議な印象を覚えていた。「当初、JOC（日本オリンピック委員会）内部は皆、参加という方向で一致していました。途中からいろんなプレッシャーがあつて、日本選手団の参加は難しいという声が出てきた。それで臨時総会で個人参加という方向も含めて話し合ったわけです。臨時総会直前の会合でも参加は過半数でした。それが実際当日になったら参加が13名、不参加が29名」（ス



1980年5月JOC臨時総会。東京・渋谷岸記念体育会館。

ポーツゴジラ37号より。委員たちはどうして見解を変えたのか？そこにあつたのは、お金の問題だった。

もし参加に踏み切れば、選手団派遣に必要な補助金約6100万円、日本自転車振興会からの補助金約9600万円はもうわけにはいかないと、JOC側が臨時総会で告げた。さらに当時は政府から出ていた約15億8000万円に及ぶ日本体育協会への補助金、いわゆる体育スポーツ予算にまで話が及んだ。総会取材していた元朝日新聞編集委員の中条一雄は、そのときのことを覚えていた。

「僕の記憶では柳川寛治文部省体育局長が、もしボイコットしなければ来年度の予算を出さないとはいわない。しかし大蔵省と交渉する熱意がなくなるといような発言をしたんだ。それでそれまで参加したいって言っていた競技団体の人間がなだれ現象的にボイコットに傾いた」

最後までボイコット反対を訴えていた清川正二は

著書『オリンピックと60年』（ベースボール・マガジン社刊）の中で、柳川体育局長のそのときの言葉を詳細に書き記している。

「私も予算を実際に担当しているものとして、体協予算の増額に常に努力してきたのですが、さきほど官房長官から『政府としての情勢にあつては、たとえ少数の選手団でも派遣することには反対である』という政府見解が出されましたので、JOCの確な対応がないと、私も政府の体育行政を預かる者の立場からは、国家財政の厳しいなかで、アマチュア・スポーツの普及と振興に関わる諸般の条件整備などの取り組みに、必ずしもプラスには絶対ならないということを恐れる次第です。JOCが政府の見解に従わなければどうなるかとの質問ですが、体協の予算をただちに全額切るということになったら、体協が飛びます。そういうことはないと思いますが、山積している問題が多いなかで、私どもにこれからそれを取ってこいと言われても、それはなか

なか私どもも燃え切れないという問題でございましょう。また選手強化事業費は増額措置をはかつており、それなりの防衛をするのが文部省体育局長であろうと思います。けれども大変厳しい面の問題が起きてくるということが予測されます」

丁寧な言葉使いの中に、じわじわと真綿で人の首をしめるような威圧があつた。スポーツ関係者は自分たちの周辺では耳にしないような役人言葉に聞き入り、背中に冷たいものを覚えた……。

スポーツ界が自主的に決めた？

1980年5月24日は、モスクワ五輪へのナショナルエントリーの締め切り日だった。この日、JOCはモスクワ五輪に参加か、不参加かを決めなくてはならなかった。JOCの臨時総会の前に朝10時30分からJOCを管轄する日本体育協会かんかつで会議が行われた。

この会議には政府から内閣官房長官・伊東正義、

文部省体育局長・柳川覚治、外務省情報文化局長・天羽民雄がオブザーバーとして顔をそろえ、各競技団体委員と有識者たちは身構えたという。

内閣官房長官の伊東は静かに入場すると、中央の議長席、体育協会会長・河野謙三の隣に座った。伊藤公プログ『モスクワ五輪ボイコットの真相』によると「河野は伊東が着席するのを見届けると『とにかく政府には表と裏がある。そこで伊東官房長官より、政府の真意、政府

の本当の気持ちを伝えてほしい。そのために私が官房長官を呼んだんだ』と切り出した。伊東は椅子から立ち上がり、もみ手をしながら話し始めた。『河野会長より、お前はスポーツは素人なので黙つていと言われてきた。しかしながら、この問題は内閣全体として取り上げている。(中略) 2月1日に一回目の政府見解を出し、4月25日にもう一度出して



参議院議長だった河野謙三は75年～83年日本体育協会会長を務めた。

いる。(中略) 政府の本心をいえば「参加することに反対」「ボイコットしてくれ」ということだ。ソ連がアフガニスタンから撤退するという気配は今のところない。そういう状況の中で参加国が多くなることは、ソ連に利用されるだけだ。オリンピックは世界情勢と切り離して考えられない。実は昨日も閣議を開催してこの問題について検討したが、かなり多



松平康隆は1980年当時、日本バレーボール協会専務理事だった。

くの閣僚から、新しい見解を出すべきだとの意見が出された。政府としては『少数精鋭』でも参加になるので、ソ連の行動を認めることになると思っています』

伊東は政府の真意は伝えたということで20分ほどで退席。そして午後2時からJOC総会が開かれた。その会議では河野が激昂^{げきじょう}し、怒鳴りまくる事態にまなつた。学識経験者でラグビーの指導者、大西鉄之祐が「今日の問題は、体協ならびにJOCの日本の将来のスポーツに関する政策の根本問題について、政府が干渉してきたということだ」と言ったときだ。「政府が干渉した覚えがあるか。君、言ったじゃないか。何がおかしいんだ。でたらめを言っちゃいじゃんよ。政府が何を干渉したんだよ」と怒声を飛ばした。そして二人の会話はこう続いた。

大西 「いや、だって、この今日のこの……」

河野 「そういうことを言うなよ。干渉された覚えはないよ。(中略) われわれが出てくれって呼んだん

だよ」。われわれが来てくださいと頼み、政府の見解を聞くことによつて、スポーツ界全体が独自で「ボイコットを自主的に決めた」。そのカタチが河野にとつてどうしても必要不可欠だったと思われる。

ボイコット反対派、IOC直訴を決行

モスクワ五輪参加を訴える各競技団体の代表たちには、ボイコット推進派からの嫌がらせや妨害が相次いだ。IOC副会長でJOC常任委員の清川正二は、著書『オリンピックと60年』の中でこう明かしている。

「私は終始『参加すべし』と唱えてきたが、最終段階になると、自宅に右派系の団体から脅迫の電話や手紙がきたり、岸記念体育会館の前には右派系団体の宣伝カー数台がボリウムをあげてボイコットをおおるデモを繰り広げた」

また自転車日本代表監督で連盟の代表だった岡本雄作もこう振り返った。「右翼の脅かしというか、

拡声器で名前を呼ばれてずいぶん脅かされました。私は横浜に住んでいましたが、横浜にも過激な右翼がいるから、気をつけてくると、所轄の警察からホットラインの番号まで教えられました。それほど緊迫した状況の中で、賛成、反対の採決が行われていたということです」（スポーツゴジラ37号より）。

5月24日「ナショナルエントリー」の締切日にJOCは挙手による採決をする。総会では、柴田勝治JOC委員長が「現状においては、日本選手団として参加することは不可能とされるので、残念ながら不参加もやむを得ない」と自らの見解を示した上で、各委員に賛否を聞いた。

ボイコットに賛成29票、反対13票。

さまざまな妨害にも屈せず、最後まで反対を貫いた13人は、竹田恒徳（恆和の父）、清川正二（ともにJOC委員）、藤田明（水泳）、松平康隆（バレーボール）、笹原正三（レスリング）、山本房生（ヨット）、林克也（重量挙げ）、岡本雄作（自転車）、鬼

鞍弘起（アイスホッケー、堤義明会長代理）、加藤大豊（クレール射撃）、大西鉄之祐、川本信正、鈴木良徳（学識経験者）

中でも松平康隆は挙手するときに、大声で「ハンターイ」と言い、態度を強く表した。混迷の会議の後、その松平を清川が呼んだ。「完全に諦めるのは、まだ早い。IOCキラニン会長に直訴する手があるだろ。この理不尽なボイコットに対してIOCが特別な措置を取ることも考えられるのではないか」。松平は深くうなずいた。

松平はすでに、この一件について考察を持っていた。1979年、ソ連がアフガニスタンへ軍事侵攻したことが伝えられ、80年1月4日、カーター米大統領が「ボイコットも辞さず……」と発言したとき、松平はカーター発言の真意をつかんだという。

「ピーンときた。人氣が低迷しているカーターは、オリンピックまでも大統領選挙の道具にするのかと思った。ナシヨナリズムに訴えることで強いアメリカ

カ、強靱な大統領のイメージを打ち出そうとしている。汚い野郎だ」

松平、清川の2人は、スイスのローザンヌのIOC本部に向かうことを決め、直ちに行動を起こす決意をした。

直訴した松平のため息

日本がモスクワ五輪の不参加を決定した数日後、清川正二IOC委員と松平康隆（日本バレーボール協会選出委員）は、スイス・ローザンヌへ出向いた。到着した翌朝、2人はIOC本部を訪ねた。レマン湖のほとりにあるホテルの最上階へキラニン会長は穏やかに2人を招き入れたという。「なぜ、わざわざ遠い日本から訪ねてきたのか?」。彼は微笑んで聞いた。

松平は力を込めて話し始めた。

「ご存じの通り、厳しい状況は、カーター大統領の選挙へのオリンピック利用であり、オリンピック憲

章違反であると思う。だからIOC会長であるあなた自身が立ち上がり、アメリカのボイコット運動は認めないという発言をすべきではないでしょうか。もしアメリカがオリンピックに不参加だといふのなら、政治介入はオリンピック憲章に違反するのだから、アメリカを処罰すべきです。その上であなた自身が世界の人々にオリンピックに参加しようと呼びかけるべきでしょう」

するとキラニン会長の顔色がみるみる変化していったという。しかし松平は言葉を重ねた。

「カーターは政治家だから何を言っても良いでしょう。言論の自由です。カーターを処罰するわけにはいかない。しかしカーター発言にUSOC（米国オリンピック委員会）が従うのなら、除名すべき。オリンピックに政治の介入は許されない。そして世界中の国々に参加しろと、あなたが発言すべきでしょう」

するとキラニン会長は一言だけ言った。

「それは、できない」。会談は後味の悪さだけを残したそう。後年、松平は私の取材に「IOCの会長がキラニンでなく前任者の（アベリー・）ブランデージだったら、事態は大きく変わっていた」と悔しそうに話した。

「72年ミュンヘン大会はテロ事件に巻き込まれた。アラブゲリラがイスラエル選手を人質にして立てこもり、17人もの犠牲者が出してしまった。世界中のマスメディアは大会を『即刻中止せよ』と声を上げた。しかしブランデージ会長は屈しなかった。Olympic Games must go on（オリンピック競技は続けなければならない）。テロの圧力に屈しないと宣言し、事件の翌日、午前中に追悼式を行っただけで、あらゆる試合を再開した。

その宣言をした夜、私は彼とお茶を飲んだ。彼はこう言った。『明日から私は世界のスポーツクリージーから何を言われるか分からない。たぶんひどい逆風に遭う。でもね松平、100年たてば褒められ

る』と。彼の言葉に僕は胸を打たれた。実際に1980年などたたずに、マスコミの論調は一変した。オリンピックの基本原則はそれまで思想、宗教、人種に左右されないだったけど、それに新しく『いかなる暴力にも屈しない』が加わったんだ。ブランデージだったら、事態は大きく違っていた……松平はため息をついた。

英国協会の巧み

モスクワ五輪に政府見解とNOC（各国オリンピック委員会）が対立しているように見せながら、敢然と“参加”をした国があった。英国である。

伊藤公ブログ『モスクワ五輪ボイコットの真相』によると、「前年の1979年5月の総選挙で労働党から政権を奪還した保守党のマーガレット・サッチャー首相は対ソ連強硬派の一人で“鉄の女”と言われたことはあまりにも有名だ。彼女がカーター大統領からの呼びかけに応じて、下院でボイコットの

方針を正式に打ち出したのは、80年1月17日のことだ。（中略）2月14日『イギリス選手がモスクワ大会に参加すべきでない』との勧告を議会で明らかにする」。

首相が下院で正式にボイコット方針を打ち出し、次に議会で「自国選手がモスクワ大会に出場すべきでない」と勧言した……。日本でも同様の事態になり、スポーツ関係者の頭上に暗雲が漂ったのもまったく同じだった。その後の展開が異なったのは、緻密で巧妙な駆け引きだった。

英国オリンピック協会（BOA）の会長、デニス・フォロースは、カーター大統領がボイコット発言をしたときから、米国のやり方を苦々しく思っていたらしい。そのフォロースに宛てて、サッチャーは政府の要請に従うように手紙で勧告した。

「BOAはIOCに対し、オリンピック開催都市をソ連以外の都市で開くように働きかけてほしい」

その要望にフォロースは「働きかけはするが、わ

がイギリスでサッカーのワールドカップを開催する準備でさえ、4年もかかった。オリンピックの準備がそんな短期間でできるだろうか」と冷静な疑問を返した。サッチャーが再度、「ソ連がアフガニスタンから撤退する前に、イギリス選手がモスクワ大会に参加することは、国際的犯罪を容認すると受け取られかねない」と訴えると、フォローズはこれにも巧みにかわす返事を書いた。

「BOAとしては、ソ連軍をアフガニスタンから撤退させる交渉を進めようとするイギリス政府に恥をかかせる意図はまったくくない」

互いの手紙でのやりとりが大詰めになると、フォローズはサッチャーの元へ使者を出して直接、質問させた。

「政府の意向に反して、私たちがモスクワへチームを派遣しようとしたらパスポートを取り上げるか？」と「ではモスクワから帰ってきたら、私たちを罰するか？」

サッチャーの答えは「いずれもイギリスの法によりできないが、（モスクワに）ぜひ行かないでほしい」だったという。

フォローズ会長は、サッチャーから言質を取った後、3月17日、BOAは「われわれは万難を排しても参加する」と声明を出し、次の手を打った。世論をしつかり自分たちの味方につけ、支援を得ることだった。（「内は、伊藤公ブログ『モスクワ五輪ボイコットの真相』より」）

80年モスクワ五輪を控える英国の陸上界には、スター選手がいた。セバスチャン・コーである。彼は陸上の800メートルと1500メートルで世界記録を持つアスリートだったが、それ以上に明晰な頭脳めいせきの持ち主であり、人間としてのプライドも強かった。NHKが2019年5月14日に放送した『アナザーストーリーズ モスクワ五輪ボイコット 幻の日本代表涙の密室劇』という番組の中で、コー自身が語っていた。



セバスチャン・コーは、現在世界陸上競技連盟会長。ロンドン五輪では組織委員会会長も務めた。

「僕はそれまで10年間をスポーツばかりやってきた人間でした。何百時間もの練習をし、欧州で一番になり、世界記録も樹立しました。そこに突然、オリンピックに出るな！」と言うのです。私は状況を広く観察してみましたが、自粛を促されたのはスポーツだけでした。石油の輸入はソビエトから続いていましたし、文化交流も変化はなく、ボリショイサーカスのイギリス公演だって開催されていた。なぜス

ポーツだけが政治の駆け引きに使われるのか、まったく理にかなっていないと思いました。ソ連の政策自体は支持しないが、ボイコットはスポーツの理念に反する行為だと思ったのです」

コーは仲間とともに声を上げ、新聞紙上ではつきりと意見を述べた。これをBOAのデニス・フォローズ会長が支持した。一方、英国政府はコーの父親（ピーター）を呼び出し圧力をかけた。同番組の中でコーは語っている。「父は大臣のところに行って、『息子は大学で経済学と歴史学で学士を取りましたので、議論は自分でできるでしょう』と、言ったのです。さらに父は、『私はあなた方の姿勢に反対です。息子も反対だと自分で結論を出しました。何かあれば私ではなく、息子に話すべきです。息子はもう大人（23歳）ですから』」。

政府は一段と態度を硬化し、BOAへの寄付や支援をやめさせるよう、スポンサー企業

に裏から働きかけた。〃スポーツ界への兵糧攻め〃だった。そこでBOAと77人の代表候補は、新聞に声明を出して資金を独自で集める作戦に出た。

イギリスの勝利のために、オリンピックに行かせてほしい。50万ポンド必要なのに半分しか集まっていない

伊藤公ブログ『モスクワ五輪ボイコットの真相』には、その結果が書かれている。

「サッチャー（首相）が不参加を訴え、政府が強硬な態度を示すたびに、国民は硬化し、BOA宛てへの送金が多くなっていった。（中略）寄せられた金額は最終的に80万ポンドに達した。当時のレートは1ポンド500円前後なので、邦貨にすると約4億円という大金になる」

BOAは総会で参加を決定し、国民からの寄付金で英国選手団は堂々とモスクワの地に到着。開会式では選手は行進せず、英国国旗ではなく、オリンピック

ック旗を掲げた。これはソ連に対しては抗議を表すと同時に英国政府の顔も立てる、計算された演出だった。

英国式茶番と腹芸

英国政府のモスクワ五輪参加への圧力や勧告に対して、BOAと選手は見事な連携と駆け引きで参加に至った……。その巧みに日本人としては敬服するとともに舌を巻いたわけだが、実はこれには後日談があると伊藤公ブログ『モスクワ五輪ボイコットの真相』に書いている。

モスクワ五輪直後に英国から体育学者を2人招いて東京でシンポジウムが開催された際に、伊藤自身が質問したのだという。

「モスクワオリンピックに英国が参加するに当たって、サッチャー首相からずいぶん意地悪をされたようですが、実際はどうでしたか」。すると2人は、「とんでもない」と答え、そして「わがサッチャー首相

はBOAに対してモスクワに行つてほしくないと
言いつけたが、あれは明らかにカーター大統領に対
する配慮からで、モスクワへ行くか、行かないかはあ
なたたちが決めることだ、と言外に匂わせていた。
だからわれわれは敢然と参加したのだ」。

つまりサッチャー首相が繰り返し述べていた「行
かないでほしい、ぜひ行くのをやめてほしい」の奥
にある真意をBOAは的確につかみ、あ・うんの呼
吸で安心してモスクワを目指したというのだ。改め
て英国の参加には日本より一段も二段も上の巧みが
あったということか？ これは空想だが、後に米国
のカーター大統領とサッチャー首相が何かの会議で
会つたとなると、彼女は、歩み寄つて、こうエク
スキューズしたのではないか？「私があんなにモスク
ワに行かないで！」と言つたのにBOAも選手も聞
く耳を持たなかったのよ。まったく失礼なんです
よ」と。

英国のモスクワ五輪参加の裏には、カーター大統

領への見事な茶番外交対策と、数々の腹芸があつた
のかは、今となつては藪の中……。しかしさまざま
なハードルを乗り越えての参加だとすれば、なぜ当
時の日本には、その選択肢を見いだすことができな
かつたのか。

五輪の参加、不参加を決める権限があるのは、各
国のオリンピック委員会(NOC)である。政府が
介入や勧告をしても、あくまで決めるのは日本オリ
ンピック委員会(JOC)でなくてはならない。そ
のJOCは、1980年当時、日本では独立した組
織ではなく、日本体育協会(体協)の中の委員会
の一つに過ぎなかつた。つまりJOCは独自の権限を
持つていないように見えても、JOCの上に体協があ
り、体協が理事会で「エントリーに反対」と決議を
行えば、その圧力と威力は直結してJOCに届いた
といえる。日本のスポーツ界には、昔から「上意下
達」があり、上が決めたことは覆せない不文律があ
つた。

ちなみに当時、日本体育協会会長は参議院議長も務めた政治家の河野謙三であり、河野と当時の総理大臣・大平正芳は、昵懇じつこんの間柄と言われていた。

五輪ボイコットで得をしたのは誰か

モスクワ五輪に参加した国と地域は81、不参加は64だった（不参加はカーター米大統領のボイコットに賛同しただけではなく、選手派遣費の工面ができない財政的理由の国も含む）。

大会中の世界新記録は36、オリンピック新記録は73、記録だけでなく数字に表せないスポーツ水準は前回のモントリオール五輪に決して引けを取らない大会だったとされたが、米国、西ドイツ、日本などが参加していないので、メダルを獲得しても価値が高くないとの見方もあった。IOCのキラニン会長は、著書『オリンピック激動の歲月』の中で、こう振り返っている。

「モスクワオリンピックは正直に言って味気ないも

のだった。つねに頭にあるのは参加しなかった人たちのことであり、もし参加しておればどんな結果になっただろうと想像したり、自問したりすることばかりだった」

そして西側諸国がボイコットしたモスクワに続く、1984年ロサンゼルス五輪では、逆に東側のソ連、東ドイツ、ブルガリア、チェコスロバキアなど16カ国のボイコットの報復がなされた。モスクワ五輪から7年後、IOC副会長を歴任した清川正二も時代を振り返って著書『スポーツと政治』（ベースボール・マガジン社刊）の中にこう書いた。

『政治の手段』のために、オリンピック大会をボイコットして「得をした」ものは、これまでに誰もいないということである。そこで私は、オリンピック大会をボイコットすることは「双方一両損」どころか「四方丸丸損」であったといっているのである。（中略）モスクワ大会をみても、ロサンゼルス大会でも、政治家達が声を大にしてボイコットを叫び、

大会を不首尾に追い込むことを狙ったが、大会はいずれも立派に成功をおさめているのである。

カーター大統領のモスクワ大会ボイコットの理由は、アフガニスタンへのソ連の出兵に反対してこれをやめさせるための行動であったが、それから8年後の現在（一九八七年）、アフガニスタンには依然として一〇万を超えるソ連軍が駐留しているのである。どうみてもアメリカのボイコットの狙いが成功したとは考えられない」

79年の暮れ、ソ連がアフガニスタンに軍事侵攻したニュースが世界に流れたとき、多くの軍事評論家は「紛争は短期間で終結する」と予想した。ソ連にとってアフガニスタン制圧は「赤子の手をひねるようなものだ」という人さえいた。その最大の理由はソ連が世界最先端の軍事力を備えているというものだった。

ところが75〜78年にアフガニスタンの国立カブル大学で教鞭をとった松浪健四郎（現日本体育大学

理事長）は、ゲスト出演した当時の夜のニュース番組でまったく異なる見解を述べた。

「この戦争はことのほか長引きますよ。場合によっては終わらない」と断言した上で、その理由についてこう語った。

「アフガニスタンは複雑な地形をした山岳地帯です。けもの道ばかりです。そこはいくら最先端の軍備であつても、戦車も通れない。さらにアフガニスタンの男にとって、国、民族、宗教を愚弄ぐろうされた、あるいは支配されたとなれば、アラールの神の元でのジハード（聖戦）だと考えて武器をとることをいとわない。たとえ戦死することになつても殉職者、勇者として敬われて天国へ行くと信じています。だから徹底して敵に向かつていく。またアフガン族には『プクトンワリ』といわれる掟があり、復讐は時間、空間を超えて代々受け継がれて、100年たつても実行されます。日本の戦国時代に「あだ討ち」が無罪だったように、復讐は今も無罪です。だからこの戦

争はちよつとやそつとじゃ終わらないでしょう。アフガニスタンの識字率は10%くらいで、人々の多くは字を読めないが、伝承されたことは決して忘れないという特徴もあります」

ちなみにモスクワ五輪については後に「勝者がいない大会だった」と言われた。米国のカーター大統領は、80年11月の選挙では再選を果たせず、カーターのボイコットに賛同した日本の大平正芳総理大臣は、同年6月に急逝。そしてボイコットをした国々で最も割を食ったのは、人生をねじ曲げられた選手だった。

高田裕司の涙の真相

モスクワ五輪を題材にしたテレビ番組で、必ず流れるシーンがある。レスリング・フリースタイル52キロ級で金メダル候補だった高田裕司が、涙で参加を訴える場面である。競技団体と候補選手が集まった総決起集会で、高田は額にバンソウコウをはった



高田裕司は涙でモスクワ五輪参加を訴えた。

まま「参加できなかつたら……今まで、何のためにやってきたのか……分かりません」と唇を震わせた。このシーンは当時テレビニュースでも繰り返し使われ、高田の涙の訴えに賛否両論が渦巻いた。一生懸命やってきたのだから、当然五輪へ行きたいだろうと感情移入した人と、逆に男のくせに人前で泣いて女々しいと反発する人もいた。当時は男は人前で泣くものじゃないという時代であり、アマチュアス

ポーツはまだ趣味のレベル程度という印象があり、高田の涙には「スポーツ程度のことと、なぜ男が泣く!？」という受け止め方も強かった。しかし後に高田は、実は自分自身を思っ言った言葉ではなかったと明かした。

レスリングは48キロ級から4キロ刻みで階級が分かれている。各クラスで選ばれる代表は1人である。「……そいつは俺が52キロ級にいるもんだから48キロ級へ一つ階級を落としていた。レスラーは普通の人で4キロの減量をする。そいつは倍の8キロを自分に課した。それが、どうしても落ちないんですよ。筋肉を^{けいれん}痙攣させたまま、ミイラみたいになつてサウナからころげ出てくる。血尿を流して拷問みたいな減量をしているのに、もう、どうにも落ちなくなる。そう、そいつの限界なんですよ。(中略) そいつの顔があるとき浮かんた。今頃また減量しているんだろうってね。そうしたら、なまけなくなつたんだ。総決起集会だとか、選手団結とか言っている自分た

ちがバカらしくなつて」(長田渚左著『おまえは風か』角川書店刊)

76年モントリオール五輪の金メダリストだった高田は、モスクワ五輪で、もう一つ金を獲る人生計画をもっていた。ところがモスクワは消えて現役を引退。郷里の群馬で定時制高校の体育の教師となり、レスリング部のコーチとなつた。

群馬国体では10階級で優勝2、準優勝3を獲得。コーチとしての評価も高かつた。「……人生でモスクワをすつ飛ばしただけ」と思つていたはずだったのに「もう一つ金を獲つてからレスリング人生を終わらせたい」と思い始めた。

84年ロサンゼルス五輪の前に現役に復帰。代表争いに加わつて、五輪の切符をつかんた。高田はロス五輪で、特別な計画をもつていた。「金メダルを獲つたら、首から下げてもらつたメダルをひきちぎつて投げてやろうと思つてたんです。でも金を獲れずに銅メダルでした。銅メダルをひきちぎつて投げて

も、あいつは負けて悔しいだけじゃないかと言われるだけでしょう？ だからやらなかった」（スポーツゴジラ37号より）。

メダルの色は違っていたが、モスクワボイコットへの抗議の気持ちは同じだった……。

首相にボイコット回避“直談判”

米国と日本の二国について、“米国がクシャミをすると日本が風邪をひく関係”とよく言われてきた。

日本政府からモスクワ五輪参加の是非についての見解は、2回出された。一方で“日本はカーター大統領（米国）のボイコットの要請に同調する”と決断を下した大平正芳首相は、スポーツ関係者の前に直接姿を現したことはなかった。しかしボイコット反対の旗振り役の中心にいた男は、直接大平と会っていた。IOC副会長で、JOC常任委員の清川正二である。大平と清川は東京商科大学（現・一橋大学）の同期生で、その同期会でのことだった。

清川正二著『スポーツと政治』によると「幸い会場で二人だけで話す機会ができた。私はぜひ、日本選手団の参加を許可してほしいと頼んだ。大平君の返事は『君が選手たちを参加させたい気持ちはよく分かるが、実は自分としては既にカーター大統領に『日本選手は参加させない』とコメントしているの』で諦めてもらいたい”というので、その場はそれ以上押すわけにはいかなかった”。

その二人きりの会談は80年4月11日で、JOCが最終的に結論を出す同5月24日の1カ月以上も前のことになる。清川は大平と直接会ったことや話の内容については誰にも明かさなかったと言われている。そして清川はその数日後、4月下旬、ローザンヌで開催されたIOC総会に出席。“個別参加”を承認することに最後の望みをかけたが、IOC理事会は、これを了承しなかった。エントリ―締め切り前に個別参加を認めることは、ボイコットを前提にしてしまうからというのが理由だった。各国のNOC

が政府と対決し、それぞれがボイコットの呼びかけをはね返すことに期待を込めたのだとも言われた。そしてJOCは残念ながら政府をはねのけることができなかった。ボイコット決定から4年後、84年9月、JOC委員会の総会で清川は、出席した委員全員に、80年のモスクワ大会ボイコットについて質問をした。

清川正二著の同書によると

『(一)「手段としてオリンピック大会をボイコットすることに意味はあると思うか」三七人の委員の内、三一人が「意味がない」

(二)「日本はモスクワ大会をボイコットしたが、今日からみてあの場合、ボイコットすべきでなかったと思っているかどうか」三七人の内、二六人が「ボイコットすべきではなかった」

(三)「モスクワ大会をボイコットしたことがその後の日本のスポーツ界に悪影響を及ぼしていると思うか」に対して「悪影響があり、現在もその後遺症

が残っている」と答えた委員は三七人中二七人であった『大学の同期会で清川が大平に会ったとき、「政治にオリンピックを利用するのは間違っていないませんか!？」と心から訴えてほしかったと思うのは、私だけだろうか……。

2016年リオデジャネイロ五輪が終了し、次はいよいよ2020年東京五輪だという期待が世間に膨らんでいた頃、笹田弥生(旧姓加納)が私の元を訪れた。

彼女は日本がボイコットをした1980年モスクワ五輪の体操女子・日本代表だった。

彼女はバッグの中から、私が編集長を務めるスポーツ総合無料誌『スポーツゴジラ』のバックナンバーを取り出した。2010年に刊行した13号、特集は『モスクワ五輪ボイコットから30年、日本は変わったのか?』だった。雑誌はボロボロにすり切れていた。彼女は表紙を撫でながら「何度も何度も読んだのです」と話を始めた。

「2020年東京大会で、私たちにも何かできないでしょうか？ とモスクワの代表だった体操仲間に出会った、いつも話します。JOCから、オリンピックと認定されているはずなのに、東京大会へのイベントや関係行事に、自分たちが呼ばれることは、まず無いです」

20年に向かってモスクワ代表だけが蚊帳の外に置かれているのは不条理だと相づちを打つと、彼女はぽつりぽつり、自分自身のことを語り出した。

「体操を始めたのは5歳でした。オリンピックに出るのが夢になったのは小学生のときです。日ソ対抗という大会があつて、ソ連の選手のエレガントな体操を生で見て、それ以来そういう体操が目標になりました。中学に入ると練習が厳しくなり、さらに上を目指そうと高校は体操の強豪校へ進学しました。15歳で全日本体操選手権を最年少で優勝して、高3のときに巡ってきたのがモスクワ五輪でした。ソ連のアフガニスタン侵攻に関するニュースや政治的な

不穏な空気が流れる中で、耳をふさぐようにして練習を続けました。

日本代表選考会を1位で通過しましたが、何の説明もないまま、日本は選手団をモスクワへ送りませんでした。モスクワ行きが無くなった……と感じたとき、毎日の練習のつらさから解放されて、少しほっとした気分にもなりました。その後は迫りくる試合に邁進^{まいしん}して練習を重ね、高校総体は3連覇、大学は体育大に進み、学生選手権を4連覇しました。

大学4年で迎えた84年ロサンゼルス五輪の選考会は、若手の台頭や自分自身のピークが過ぎていたこともあつて9位。結局オリンピックには手が届きませんでした。最近、2020年東京大会が近づきつつあつて、自国での開催の話題も増える中で、なぜ私たちが行けなかったのか？ 何だか本当に納得がいかなくなってきて、やり場のない思いになるんです」

彼女の話に耳を傾けながら、同じように五輪代表

権をつかみながら、宙ぶらりんになったままの人が178人もいることを改めて想った。彼ら、彼女らは今、何を考え、あのモスクワをどう感じているのか。2020年東京大会で五輪代表としての「市民権」を得るにはどうしたらいいのか、知恵を絞った……。

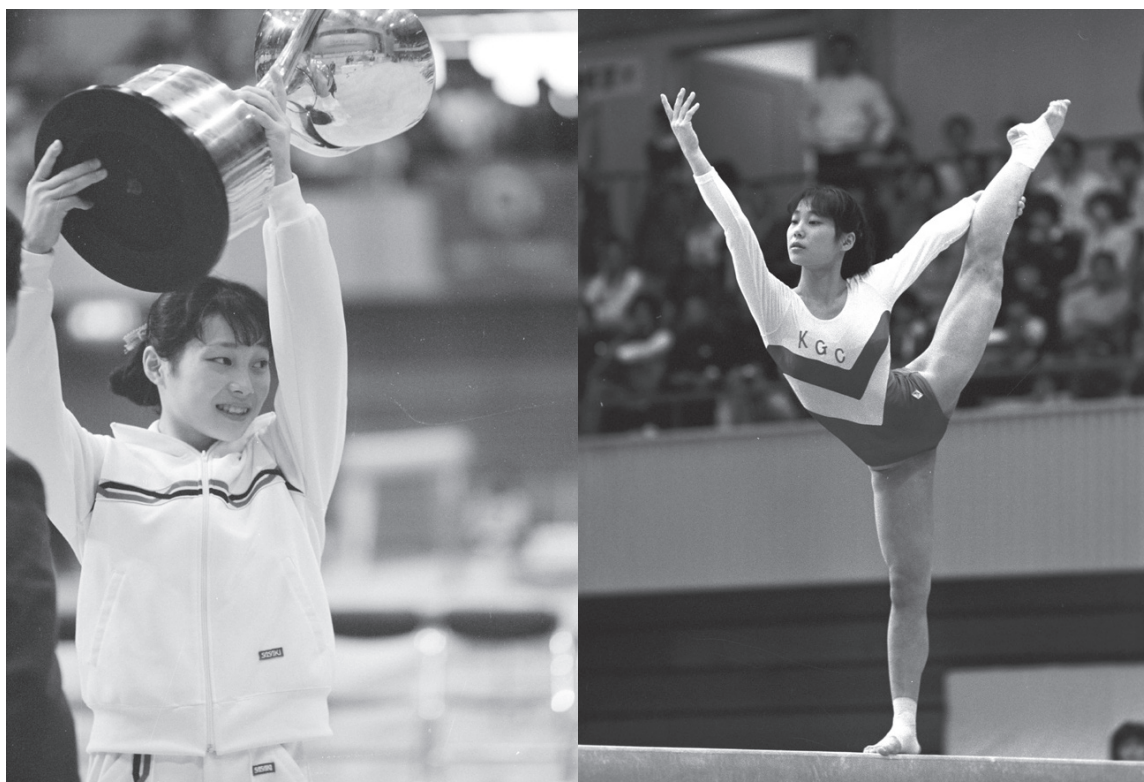
モスクワ代表は「オリンピック」なのか、否か？

2020年東京大会が近づく中で、1980年幻のモスクワ五輪代表は、どんな気持ちでいるのだろうか。話し合う内にアンケート調査の実施を思いついた。しかし他の大会とは異なり、選手の所在をつかむのは容易ではないことが想像された。何しろ彼らは37年にもわたって一堂に会したことがないのだ。とにかく当時の選手団名簿を手がかりにして、各競技団体の知人から知人へネットワークを広げて連絡先を集めた。その結果、住所の分かった人は178人中、92人。その92人にアンケートを出し、

62人から回答を得た。

設問（1）「日本のボイコットには意味があったか？」に「いいえ」が74%。設問（2）「ボイコットをすべきではなかったか？」の問いには「はい」が82%を占め、「ボイコットはあなた自身に影響はあったか？」の問いには「大変にダメージを受けた」「影響があった」が計84%にも及んだ。

2020年大会を前に負の遺産も噛みしめる必要性を感じ、このアンケートをベースにして、日本スポーツ学会で『モスクワ五輪ボイコットから37年、日本は変わったのか』をテーマに、2017年10月10日、東京・文京区の筑波大学でシンポジウムを開催した。登壇者はモスクワ五輪代表でレスリング・フリースタイル52キロ級の高田裕司、82キロ級の太田章、馬術競技代表の竹田恆和、さらに自転車競技日本代表監督だった岡本雄作などであった。まず、会の冒頭で笹田からモスクワ代表選手の身分について疑問が投げかけられた。



笹田弥生(旧姓加納)のNHK杯優勝。モスクワ五輪での期待は大きかった。

「2003年に設立されたNPO法人日本オリンピック・アソシエーションは、モスクワの代表を『オリンピック・アソシエーション』と認めています。世界オリンピック・アソシエーション(WOA)や国際オリンピック委員会(IOC)はオリンピックをどう定義するのでしょうか」(実はこの会を開催する以前にWOAに日本スポーツ学会から問い合わせをしたが、返事は来なかった)

登壇者の太田章が答えた。「個人的には『オリンピック』だと思いたい気持ちはものすごくよく分かりますが、自分はその後3回の大会に出場して、ロス、ソウル、バルセロナと大会後に通し番号の付いた『参加証』が送られてきました。モスクワはありませんでした。IOCはオリンピック選手と認めてもIOCは認めていないということでしょう」。

馬術競技代表でJOCA会長(当時)の竹田も「IOCは各国のNOCに招待状を出します。モスクワのときは、JOCAは実際に選手を送っていませんし、最終的には日本選手団名簿を作成しましたが、それ

もモスクワ組織委員会には送っていません。エントリーしていないわけですから、正式に「オリンピック」と認めるのは難しい」。

1912年ストックホルムの第5回大会から日本代表はオリンピックとして存在してきた。しかし80年モスクワ代表は正式にはオリンピックとは呼べない……場内はシーンとなった。

虚しさや憤りは決して消えない

1980年、幻のモスクワ五輪代表178人中で住所の分かった92人に送ったアンケートの設問で「モスクワの後、競技人生を何年続けましたか？」があった。

モスクワで終わろうとしたが、心の整理がつけられず2年、3年競技を続けた……という選手は少なくないが、その後「15年間」も、競技生活を過ごした選手がいた。レスリング・フリースタイル82キロ級の代表だった太田章である。モスクワの後、84年

ロサンゼルス↓88年ソウル↓92年バルセロナ大会に出場した。96年アトランタは国内選考会で敗れたが、38歳まで闘い続けた。

異例の長さの競技人生には特別な身体能力があったことは言うまでもないが、3度の引退を挟みながらも、15年間も競技を続けたのにはどんな理由があったのか。後日、改めて聞いた。

太田「もし23歳のとき80年のモスクワ大会に順調に出場できていれば、これほど長いレスリング人生にはならなかったことは、はっきりしています」

——するとモスクワ大会は心・技・体が充実してベストだったのに、結果を出す場を奪われたということですか？

太田「いや、今振り返れば、身体的な頂点はモスクワ大会ではなかった、まだ未熟でした。ただし、どの大会へもそのとき持っている能力のすべてをぶつけて闘ってきたという意味では、23歳でわざわざ卒業の提出を遅らせ、大学5年生を選び『早稲田大学



太田章は現在、早大教授を務めている。

学生』という肩書きにこだわってモスクワ大会に出ようとしたレスリングへの情熱は、そのときにしかない純なものでした。そういう意味で掛け替えのない23歳の舞台を奪われたことへの憤りは特別なのです」

——モスクワの後、ロス、ソウルの2大会で銀メダルを獲得。重量級でのメダル獲得は日本レスリング史で初の偉業でした。モスクワボイコットで味わった虚しさは、銀2つの栄光で帳消しにはならないのですね？

太田 「ならない、まったく別物。日本と同じようにモスクワ五輪ボイコットをした米国、ボイコットを呼びかけたカーター大統領の行動は間違っていたと確信しています。でも米国はボイコットの後、代表選手をホワイトハウスに招き、公式ユニホームを一人一人に手渡し、なぜ米国はボイコットをするの

か。世界平和のためにオリンピックをボイコットするのだ」という大義をカーターは選手に与えた。日本は小さなバッジと認定証だけ。何の説明もないまま……今に至ります。国というものの冷たさをあのとき骨の髄まで味わった。今まで一度だって、1日だってモスクワを忘れたことはないです」

モスクワ五輪が生涯に一度の代表だった人は178人中104人もいた。

北朝鮮危機で訴えた「五輪休戦」

2020年東京五輪への催し物やイベントが各地で開かれるようになっていた。しかしその中に1980年幻のモスクワ五輪代表が招かれることは、まず無い。そういう状況を変えたい、彼らや彼女らが五輪代表としての「市民権」を得るにはどうしたらいいのか!? 日本スポーツ学会の中で議論が交わされていた頃、北朝鮮が頻繁に核実験や弾道ミサイルを発射するようになっていた。

(※日本スポーツ学会詳細は4ページ)

数カ月後に韓国で開催される2018年2月の平昌冬季五輪に向けて、不穏な空気が漂い始めた。北朝鮮の目的は何なのか!? その脅威に対して世界中が身構える雰囲気だった。

2017年9月、フランスのローラ・フレセル・スポーツ相がラジオで「安全が確保できなければ、フランス選手団は国内にとどまる」と、平昌冬季五輪への選手派遣の見送りを示唆する発言をすると、それに呼応するようにドイツ、オーストリアなど欧米各国からも選手派遣を危ぶむ声が続いた……。

またしても世界的な五輪ボイコットの事態に陥るのか!? 危機感を募らせたスポーツ学会は『五輪休戦』を世界へ広く発信しようと考えた。(※五輪休戦とは戦いを休んで、オリンピックを開催しようというもの。紀元前9世紀に始まった古代オリンピックはギリシャの都市国家間で休戦協定が結ばれ、大会期間中にすべての戦いが停止された)

2017年11月28日、第8回スポーツ学会大賞の発表と授賞式が行われる際にも『五輪休戦』をアピールしようということになった。その年の大賞受賞者はバスケットボールプレーヤー・田臥勇太(栃木ブレックスⅡ現・宇都宮ブレックス所属)であり、式に駆けつけてくれたレスリング世界王者の文田健一郎も休戦運動の呼びかけに応じてくれた。

文田「北朝鮮問題で五輪不参加を示唆するニュースに衝撃を受けました。競技以外で不安があると選手は練習に集中できなくなります。20年東京大会を目指している自分にとっても人ごとではないと強く感じています。そのためにも五輪休戦の活動を知ってもらいたいです」。さらにこの会に出席したパラリンピック・陸上の銅メダリスト重本沙絵(旧姓辻)、大賞受賞者の田臥勇太、体操女子で幻のモスクワ代表・津田桂(旧姓内田)も休戦の呼びかけ人に名前を連ねてくれた。

そして実際にボイコット被害の体験者として、80

年モスクワ幻の代表で体操女子代表だった笹田弥生（旧姓加納）も登壇して訴えた。

「80年モスクワ五輪では高校生でした。必死で練習してようやくつかんだ五輪切符なのに、身に覚えのないことで失いました。あんな経験は、どこの国の選手にも絶対にしてほしくない」。彼女の言葉は場内の人の心に強く響き、新たな運動へとつながっていった……。

2018年2月の平昌冬季五輪を数カ月後に控えて、北朝鮮のミサイル発射が続ぎ、欧米の国々から選手の派遣を危ぶむ声が上がっていた。日本スポーツ学会の『オリンピック休戦』への活動はさらに重要なものに加え、本誌『スポーツゴジラ』でも休戦への呼びかけとオンラインでの休戦署名の手順を掲載し、一般へのアピールに努めた。

スポーツ界の問題に意識の高いライターの木村元彦が「日本から発信する大切な署名活動だから、日本外国特派員協会」での会見が有効だろうね」と知

恵をつけてくれた。それでは……と国連の元事務次長で国際オリンピック休戦財団の理事でもある明石康に相談に行った。それまでお会いしたことはなく初対面だったが、私の話をよく聞いてくださり、一緒に外国特派員協会での会見にも登壇してくださる事になった。

百人力だった。2018年1月29日、実際に五輪出場の機会を奪われた80年幻のモスクワ五輪代表の笹田弥生とともに3人でスピーチをした。

明石は「98年長野冬季五輪では、国連の要請で米軍が一定期間イラクへの空爆を見合わせた。失望しても絶望してはいけない」と語った。笹田も実体験から「競技人生のピークに出場機会を奪われたことは、今も納得がいかない。夢をもって五輪を目指している世界中のアスリートに同じ思いをさせてはならない。幻のモスクワ代表だからこそ責任がある。一人でも多くのご署名をお願いしたい」と海外メディアに協力を要請した。

コロナ禍に考える② 1980年モスクワ五輪をなぜボイコットしたのか!?



2018年1月29日、日本外国特派員協会で「オリンピック・パラリンピック休戦」を呼び掛ける。
左から長田渚左、明石康氏、笹田弥生氏

この会見の後、海外からのオンライン署名が、ぐんと増えた。ロシアや中東地域など綴りが難解な人名も多く、手応えを感じた。平和への願いのこもったずっしりと重い世界中からの署名を国際オリンピック休戦財団と国連へ国際郵便で提出。次に平昌の五輪大会組織委員会を経由してIOCへ届けるのがベストだと考えた。

スポーツ学会を代表して若手のTが平昌の五輪組織委員会へわざわざ署名を届けに行った。

間に入ってくれた韓国の有力スポーツ関係者も「段取りはついている。任せてください」と言っていた。

ところが紆余曲折があり、現地で「署名は受け取れない」という事態になった。思いもかけない状況に頭を抱え、あちこちに相談。元IOC委員で、当時日本障害者スキー連盟会長の猪谷千春を頼ることにした。猪谷は事態を察して使者を快諾してくれた。「明日から平昌に行くから、直接IOCのバッハ会

長に手渡しますよ」

後日、I O Cから署名受諾の礼状がスポーツ学会宛てに届いた。確かに数カ月の間に朝鮮半島情勢は大きく動いた。頻繁に弾道ミサイルを打ち上げていた北朝鮮は大会1カ月前に突然五輪参加を表明。開会式では朝鮮半島旗を掲げて韓国とともに入場行進をした。大会組織委員会が私たちの署名を受け取らなかった背景には、北朝鮮の顔色を窺^{そんたく}つての忖度^{そんたく}があつたのだと思われた。

五輪は政治そのものだった。

幻のモスクワ代表を聖火ランナーに

2017年10月「モスクワ五輪ボイコットから37年、日本は変わったのか!?」というテーマでシンポジウムを開催する際に、どうしてもご登壇いただきたい方がいた。当時J O Cの会長だった竹田恆和だ。竹田は80年モスクワ五輪の馬術の幻の代表だったが、公の場でそのことを語ったことがなかったからだ。



2017年11月28日、東京・渋谷区で行われた日本スポーツ学会でオリンピック休戦を呼びかける左からプロバスケットボール選手の田臥勇太、レスリング世界王者の文田健一郎、パラリンピック陸上400メートル銅メダリストの重本沙絵、モスクワ五輪体操女子代表の笹田弥生、同じく津田桂、スポーツ文化評論家の玉木正之（敬称略）



竹田恆和(当時JOC会長)は'80年モスクワ五輪馬術の幻の代表だった。

2020年の東京大会を成功させるためにもモスクワボイコットの検証、再考は欠くべからざるものだと考えるので、ご登壇いただきたいと説明すると、竹田は「よく声をかけてくれました。万難を排してでも行きますよ」と、その場で自分の手帳に10月10日を記した。彼はこうも言った。「JOCの会長をお引き受けしたのは二度とモスクワのようなことが無いようにという思いからでした……」。

幻のモスクワ五輪代表へのアンケート調査依頼書の差し出し名には、日本スポーツ学会に加えて、スポーツ庁長官(当時)で日本オリンピックアズ協会会長の鈴木大地、さらに幻の代表の当事者だった柔道の山下泰裕、体操女子の笹田弥生も名前を連ねた。

長い間、同じ境遇のモスクワ五輪代表と話をしていた笹田は、設問作りには慎重だった。

「中には『37年もたつてなぜ?』今ごろになって触れないでほしい」という人もいるはずですから、なるべく自由記述を増やして、望むことを明快に書いてもらいたいです」

その調査の中から2020年東京へ向けての聖火リレーのランナー希望や、出身競技の観戦希望、開会式参加などの具体案を拾って、シンポジウムの登壇者に披露し、意見を聞いた。登壇者だったレスリング52キロ級代表だった高田裕司、82キロ級代表の太田章らが「聖火ランナーをすると五輪マークの入ったユニフォームが一式全部支給されるので、ぜひ聖火ランナーにモスクワの幻の選手の起用を促したい」と強く主張した。

2020年東京大会への聖火ランナー募集は2019年夏に始まるので、その前にモスクワ五輪代表の何らかのカタチでの大会参加を提案する署名活動も始めようということにもなった。

まず、このモスクワボイコットをテーマにしたシ

ンポジウムそのものが日本で初だったことを踏まえ、会の内容を掲載した『スポーツゴジラ』37号を刊行。次に署名を集めるための段取りを整えていた矢先、精力的に活動をしていた笹田弥生が2019年5月、肝不全のため急逝した。56歳の若さだった。

当時JOCの選手強化委員長で笹田と同じモスクワ五輪幻の代表だった山下泰裕は彼女の無念をくみ「必ず笹田さんの思いを繋ぎます」とメールをくれた。ほどなくしてJOC会長の竹田が辞任すると、山下がその職責を担った。2019年7月2日、山下は新任のあいさつで東京五輪・パラリンピック組織委員会森喜朗会長を訪ねると、まず「聖火リレーにぜひモスクワ幻の代表の起用を」と提案した。

今だからこそ考える五輪の意義

モスクワ五輪幻の代表178人は、国内ではオリンピックとされるが、IOCや世界オリンピック協会(WOA)では、正式にオリンピックとは認め

られていない。その幻の代表選手に出したアンケートの設問に「モスクワボイコットはあなたの人生にどんな影響がありましたか」があつた。

「大変なダメージを受けた。当時は人生最大の事でした」(柔道代表)

「何年もかけて練習を重ね、生活の時間を投入し、一生に一度かもしれない機会に遭遇するつもりだった。すべての努力が水の泡。経験のない喪失感だった」(体操代表)

「モスクワ五輪ボイコットは大きなダメージで引退のきっかけとなった」(フェンシング代表)

「プレーヤーとして最高の時期であつた。悔しいという一言では言いつくせない」(ハンドボール代表)

「技術的にも体力的にも最高潮であつた。それなのに参加できない。二度と29歳の自分は戻ってこない」(ライフル射撃代表)

トップスポーツ選手にとって、五輪は自己表現のかけがえのない舞台のはずだった。記述はあまりに

もリアルで、涙なしでは読めないものが多い。

一方、79年にソ連の軍事侵攻によるアフガニスタン紛争はすぐには終わらないと公言した松浪健四郎は現在、日本・アフガニスタン協会の理事長でもある。彼は今、40年前の日本のモスクワ大会ボイコットは、日本とアフガニスタンの友好関係を考えると、仕方のないことだったのではないかと溜息をついた。

「自分も学生時代は懸命にレスリングをやり、全日本インカレで優勝経験もありますから、オリンピックに出たかったという選手の気持ちには痛いほど分かります。ただし皆は知らないでしょうが、日本とアフガニスタンには長きに渡る友好関係があります。大正時代からお付き合いがあり、1930年代に修好条約を結び、35年には日本人農業技師がアフガニスタンに派遣されて、植林、灌漑、果樹栽培などを指導して現地で大変感謝されました。

私がアフガニスタンの大学で教鞭を執っていたと

きには、アフガニスタンの大使から『1948年11月に判決が出た東京裁判そのものを否定し、日本人被告全員を無罪としたインド人のラダ・ビノール・パール判事を私たちは心から応援しました』と聞かされていました。加えて69年にはザヒール・シャー国王とホマイウ王妃が来日され、その返礼のご招待で71年に日本の皇太子殿下と美智子妃殿下（現在の上皇上皇后両陛下）がアフガニスタンを訪れて友好を深められています。

山岳地帯のアフガニスタンは石油や鉱産物が無尽蔵にあるといわれ、南から英国、北からはソ連が狙っていて、長く英露両勢力の緩衝地帯でしたが、日本とアフガニスタン両国はただの一度も対立したことがない真の友好国なのです。その大切な国が侵攻されて苦しんでいる状況を見無視して、いくらオリンピックだからといってもモスクワ大会に参加するとは難しい面もあっただろうと推察されます。だから日本にはあの選択しかなかったのではないかと……

という気がします。

ボイコットでの一番の問題はIOCです。大会の開催地を他に移そうと思えば、いくらでも可能だったでしょう。そういった手を打たなかったIOCの無策が最も問題だったはずです」

モスクワのボイコットに最後まで反対し、当時のIOCキラニン会長に直訴するため、スイスまで出向いた松平康隆（元日本バレーボール協会会長）には日本のスポーツ界について幾度も取材してきた。彼は悔しそうに言った。

「私自身も含めてだが、日本のスポーツ関係者のスポーツの地位向上の努力は足りない。いまだにスポーツは文化と区別して語られる。スポーツは単なる身体運動で文化の一員と見なされていない。日本のスポーツ界の地位は30年前どころか、50年前と変わっていない。多くのスポーツ団体の要職に政治家を受け入れ、依存してきたこともスポーツの自立を妨げた。自分たちの仲間から自分たちの代弁者を選出

し、政治を動かすぐらいにならなくてはいけない。スポーツの役割はもつともつと深いし広い。本来スポーツは人が生きる上での手本となり、要にもなるはず……」（2011年、肺気腫のため死去。享年81）

2020年東京大会は、新型コロナウイルスの影響で1年延期された。今ここで負の遺産を含めて、人にとつてのスポーツの意味や五輪の意義を根っこから掘り起こしておかないと、平和の祭典の土台はさらにぐらついたものとなる。とにかくモスクワの幻の代表からも要望の多かった聖火ランナーへの推薦署名を日本スポーツ学会は半年間集め、IOCへ2019年12月21日に提出。IOC山下泰裕会長の背中を押した。

2020年2月、全国の自治体が発表した聖火ランナーには、幻のモスクワ五輪代表の名前が数多くあった。来年に延期された東京大会開催の折には、日本全国で幻のモスクワ代表が走る……。 （敬称略）

夢劇場『馬』

No.22



アリエナイ

『偉業』と『無敗』は、今年の競馬で最も使われた単語ではなかっただろうか？

三歳馬がクラシックレースを一つ獲得するのも非凡なのに、三冠馬が牡馬^{ぼば}と牝馬^{ひんば}の両方に出現した。しかも、コントレイル、デアリングタクトの両馬はともに無敗での三冠達成だった。

この二頭が11月29日のジャパンカップ（JC）で雌雄を決するというニュースに心躍らせていたら、秋の天皇賞を制したG1レース八冠馬の五歳、アーモンドアイまでがJC出走を宣言した。

現在、『世紀の三強馬対決』で大騒ぎなのだが、本誌49号が皆様のお手元に届くのは12月11日以降なので、その頃にはすでにレース結果が出てしま

っている。うーん。でもそう考えると結果を知らない「今」が最高に楽しい。もはやJCはどの馬が勝つてもいい……神の境地だ（笑）。

「史上最強馬を見極める？」この偉大なレースを「数十年に一度のレース」と評する人がいるが、これほどのビッグレースは私たちの目が黒いうちにはもう無いのではないか……？ ミラクルでべらぼうな前代未聞の馬揃えを、車寅次郎なら「持つてけドロボー」と叫ぶかもしれない。

私は当日、個人的にはデアリングタクトの単勝を拝観料として握り締める。

忘れもしない4月12日の桜花賞。コロナ禍による緊急事態宣言下の阪神競馬場は冷たい雨に見舞われた。直線を向いたとき、彼女は18頭立ての12頭目。馬場は重まで悪化。力を出し切れずに終わる……と思った矢先、大外からその名の通り「大胆な戦略」で差し切った。「アリエナイ」。彼女が蹴散らす泥しぶきに人々は酔った。超の付く今年の隆盛が、彼女から始まったことを忘れない。



「五輪」の 息子の独り言

のぶまさ
父・川本信正



川本 峰男 (かわもと・みねお)

1956年生まれ。1979年、(株)後樂園スタジアム入社以降スポーツ事業全般に携わる。特に2010年以降は競馬事業の振興に努める。2020年3月、41年間の会社生活を終える

私の父は、24年前に亡くなった川本信正。スポーツ評論家として、88歳の生涯を閉じるまで、日本のそして世界のスポーツ界を俯瞰しながら様々な意見を述べてきた。

共同通信に最後の原稿を発信したのが1996年1月7日。近代オリンピック開催100年を飾るアトランタ五輪を讃える内容であった。197という国と地域から、1万人を超えるアスリートが一堂に会したこの大会を讃え、そしてその開幕を心から待ち望んでいた。

残念ながら、父は6月に亡くなり、7月に開会したアトランタ五輪を見ることはできなかった。

父はオリンピックを愛していた。世界の若人の友好と世界平和の実現。オリンピックムーブメントが掲げるこの理想を父はことのほか愛していた。だからこそ、1984年のロサンゼルス大会以降の過剰な商業主義と共に変質し始めたオリンピックを憂い、そして厳しい警鐘を鳴らし続けてきた。

ご承知の方も多いと思うが、父は1936年のベルリン五輪開催の年に「オリンピック」を「五輪」という言葉に言い換えたことでも知られている。読売新聞運動部記者であった父が、上司から「オリンピックって言葉は意外に言葉として長いよな……」どうにか、いい言葉がないもんかね」と問いかけられたことが、そもその始まりとか。

宮本武蔵の「五輪書」にヒントを得たと本人は語っているが、いずれにしても父は「五輪」という言葉を造語して新聞に掲載した。以来、読売以外の新聞社もこれに追随して次々と「五輪」という言葉を使い始めた。余程使い勝手が良かったのだろう。

父の晩年、私が冗談めかして『商標登録』でもしておけば、いまごろ大金持ちになっていたな」と話すと、とたんに怒られた。「五輪という言葉は、スポーツを愛するみんなのものだ。五輪という言葉でオリンピックを身近に感じてもらえる。そうすればオリンピックの精神も理解してくれるじゃないか。

日本にオリンピックムーブメントを広げていくためにも『五輪』という言葉を使えることが必要なんだ。もっと勉強しろ」。父の思いを理解せずに軽率に発した自分の言葉を恥じ入ったが、同時にその怒気と真剣さに改めて父の「五輪」という言葉とオリンピックへの深い思いを感じたことを覚えている。

その「五輪」をIOCが昨年商標登録してしまった。「五輪」の不正利用、乱用を防ぐ目的だと聞いているが、IOCにはこんな父の思いをぜひ受け止めてもらいたいものだと思っていてる。

延期された「2020東京五輪」の開催が未だ不透明な中で、父がこの状況を見たらどのようなコメントを発するであろうか。叶わぬこととはいえ、今こそその言葉を聞いてみたいという思いは募るばかりだ。

バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011

埼玉県新座市野火止8-16-32

株式会社東美物流

『スポーツゴジラ』係

送料値上りのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料 1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の春号第50号は2021年3月

初旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みにいただけます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫

●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左

（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／佐久間

昇二（ぴあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッ

ポン放送取締役相談役）／永井憲一（法政大

学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山

口良治（京都工芸大学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®

2020年12月11日発行

第1巻第49号

無断転載を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

平塚貴大・山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 図書印刷株式会社

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401